

多人数調査にみる首都圏若年層話者の 主格・対格標示の一樣相

白岩広行(立正大学)

1. 調査の目的・理論的背景

方言で格助詞ガ・ヲはいつ使われるか？

「脱主題化仮説」「焦点階層」(下地2019a)を首都圏で確認

文の情報構造……

主語は主題であることが多く、述語は焦点であることが多い
……これがデフォルト

例)俺φ先帰るわ。じゃあな。

→ デフォルトどおりに「主語＝主題」なら標示不要(無助詞)

口語における格標示は無助詞がデフォルト
そこから逸脱するときには標示が必要

脱主題化仮説:

主格ガは、主語が主題であるというデフォルト予測からの逸脱を標示する標識である(下地2019a:10)

デフォルトで主題と解釈されやすい名詞句ほど、主題でないときにガによる脱主題化が必要になる(程度差の問題)

主題のない文焦点(中立叙述)の場合……

[有生性]有生>無生

[動作主性]A(他動詞文の主語)>SA(自動詞文の動作主主語)
>SP(自動詞文の対象主語)

……有生性・動作主性が高いほどガで脱主題化されやすい
(無助詞のままだと主題と誤解されやすいため)

焦点階層:ある言語で、以下の焦点階層の左側ほど形態的な
焦点標示の必要性が高まる。(下地2019a:13)
対比>WH応答>WH

(1)「飲んだのって次郎だっけ？」

「違うよ、太郎{ガ/φ}飲んだの」【対比焦点・主語】

(2)「飲んだのって水だっけ？」

「違うよ、ビール{ヲ/φ}飲んだの」【対比焦点・目的語】

(3)(5)に答えて「太郎{ガ/φ}飲んだの」【WH応答焦点・主語】

(4)(6)に答えて「ビール{ヲ/φ}飲んだの」【WH応答焦点・目的語】

(5)「誰{ガ/φ}ビール飲んだの?」【WH焦点・主語】

(6)「何{ヲ/φ}飲んだの?」【WH焦点・目的語】

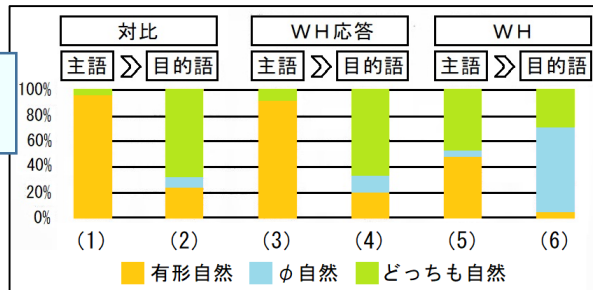


図1 共通語口語の有形格標示・ハダカの割合と焦点タイプ
(九州大学学生100人調査、下地2019a:14を着色加工)

「共通語口語」の結果として位置づけ

2. 調査の概要

首都圏の大学生156名を対象にオンライン授業で多人数調査
(<https://forms.gle/GLTFkCrXsSfVgVv599>)

→ 東京・千葉・神奈川出身者94名の回答を集計

(埼玉は調査②の結果が北関東・東北と同傾向だったので除外)

【調査①】文焦点の場合の有生性・動作主性の関わり

(下地2019bを参考に設問を作成)

(例)あなたの目の前で誰かが箱をつぶして大きな音が出たとします。大きな音に驚いた友人が別の場所からやってきて、あなたに「何かあった?」と尋ねました。どう答えますか? 自然な言い方すべてにチェックをつけてください。

□あの人{ガ}が箱をつぶした。

□あの人{ガ}が箱をつぶした。

□あの人{φ}が箱をつぶした。

□あの人{φ}が箱をつぶした。

【調査②】下地(2019a)の図1と全く同じ調査

【謝辞】アンケートに協力してくださった白岩の授業の受講生のみなさん(立正大学132名、青山学院大学24名)に感謝します。なお、調査は両大学の研究倫理に関するガイドラインを確認のうえ、任意かつ無記名式のものとして、白岩の責任でおこないました。本研究はJSPS科研費JP19H01255の助成を受けたものです。
受講生むけ解説動画 前半 <https://youtu.be/7ps2giKIMjA>
後半 <https://youtu.be/cGnk90XHA5U>

【参考文献】下地理則(2019a)「現代日本共通語(口語)における主語の格標示と分裂自動詞性」竹内史郎・下地理則編『日本語の格標示と分裂自動詞性』くろしお出版/下地理則(2019b)「日琉諸語の格体系の多様性の記述と説明モデルの構築を目指して」『日本語文法学会第20回大会発表予稿集』

3. 調査結果

左上の71%だけ
極端に変な数字

表1 文焦点環境での主語の標示(調査①、ヲの有無は捨象)

	有生・代名詞	有生・人間	無生物
A	あの人{ガ/φ}箱{を/φ}つぶした 71%	事務の人{ガ/φ}箱{を/φ}つぶした 92%	看板{ガ/φ}箱{を/φ}つぶした 93%
SA	いきなりあの人{ガ/φ}立ち上がった 89%	いきなり事務の人{ガ/φ}立ち上がった 90%	いきなり看板{ガ/φ}動いた 60%
SP	いきなりあの人{ガ/φ}倒れた 70%	いきなり事務の人{ガ/φ}倒れた 80%	いきなり看板{ガ/φ}倒れた 63%

高
動作主性
低

■ガ自然、■φ自然、■どちらも自然 の割合を横棒グラフで示す

➢ ガの使用が多いが、有生性、動作主性が低いとφも自然になりやすい(「どちらも自然」が増える)

→下地(2019a, b)の予測・データとおおむね合致

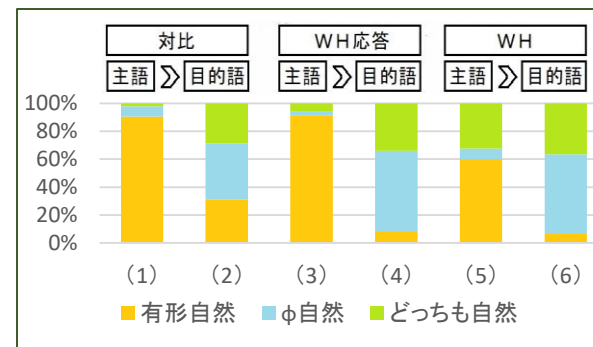


図2 首都圏若年層話者の有形格標示・ハダカの割合と焦点タイプ

➢ 傾向は下地(2019a)の図1と同じ

➢ 目的語でφを自然とする割合が比較的多い
(埼玉・北関東・東北出身者はさらに多く、(4)(6)でφが8割以上)

4. まとめ

首都圏若年層方言のガ、ヲの使用傾向は「脱主題化仮説」「焦点階層」(下地2019a)の予測にしがたっているとみられる。